今、なぜスマホなのか？

”究極の個人用入出力デバイス“がもたらすもの

株式会社インテック　執行役員
荒野 高志

1986年東京大学大学院理学系研究科情報科学修士課程修了後、NTT入社。OCNのネットワーク設計・構築・運用を担当し、同サービスを立ち上げた。また、国際的なインターネット統括組織ICANNのアドレス評議委員会副議長や、次世代インターネット推進組織のIPv6普及・高度化推進協議会常務理事を務めるなど、インターネット黎明期より日本および世界のインターネットの発展に寄与してきた。2002年インテック・ネットコア取締役CTO、2006年同社社長、2008年インテックシステム研究所社長、2010年よりITホールディングス執行役員事業推進本部長、2013年4月より現職。

スマホのここがスゴイ

家のなかを整理していたら30年前の科学雑誌『Newton』が出てきた。21世紀の生活という特集で、宇宙旅行が日常となり、ガンも克服されている。まさに夢の世界だが、今振り返ると実現されていないものばかりだ。が、ひとつだけあっさりと普及しているものがある。携帯テレビ電話だ。しかも雑誌のなかではバカでかい筐体、思わず笑ってしまった。

しかし、今のスマホのスゴさはそのコンパクトなところだけではない。

◆◆◆◆

一つ目のスゴさはスマホに搭載されている技術。加速度などの各種センサーの搭載もさることながら、裏で動いている人工知能技術、ビックデータ技術は利用者の知らないところで大活躍している。従来の音声認識技術は、話題の分野を絞り話者を特定して学習することで、ようやく応用可能な認識率になると言われていた。今のスマホ（正確にはスマホの向こうにあるクラウド）は、何億・何兆件に及ぶ世の中のテキスト検索の履歴を解析し、今どういう「言葉（ワード）」が発せられやすいかをよく知っている。それに加え、位置情報や個人の履歴・特性をからめて判断し、十分実用に耐える機能となった。

◆◆◆◆

二つ目は、スマホはコンピュータだということだ。つまり、消費者の手に届いた後も何にでも進化できる。電話からゲーム機、情報端末、プレゼンツール、音楽プレーヤーに…。有史以来、人間はいろんなツールを開発したが、コンピュータは唯一の汎用ツールなのだ。日本のいわゆる〝ガラケー〟は各種機能を搭載するも進化はしない別物だ。

◆◆◆◆

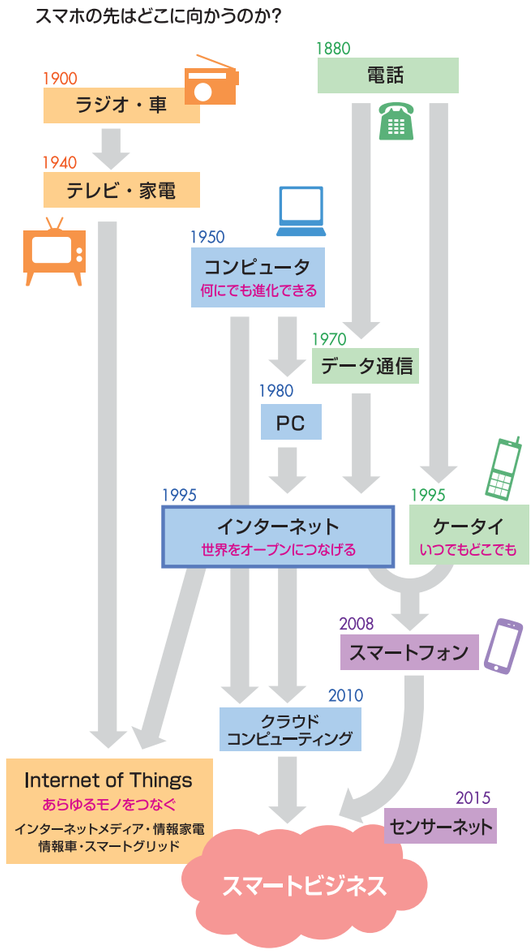
さらに、スマホはバーチャル世界への、いわば究極の「個人用」入出力デバイスなのだ。この入出力の窓は、例えば時計、洋服、メガネなど何と結び付いてもよかったわけだが、携帯電話は通信回線と電池がすでに備わっていて、そこそこの大きさであるという条件を持っていた。まさに個人密着デバイスとしてぴったりであったのだ。最初に、「iPod＋電話→iPhone」を世に出したアップルのスティーブ・ジョブズ、やはり彼はスゴい。

プラットフォーム時代の到来

当たり前のことだが、スマホはインターネットの上に乗っている。インターネットの本質は「オープンネット上でIPアドレスを持てばどこの誰、どこのコンピュータでもつながること」である。それは不特定多数のコラボ環境として機能し、イノベーションを誘発してきた。

携帯電話時代は携帯会社が機能を作りこみ、他の人はそれを使うだけだった。一方、インターネット時代は提供者と消費者の区分があいまいになり、誰もがソフト提供者になれ、その提供ソフトがさらに他のものと横連携する。そして、いわゆる「プラットフォーム」を形成する。世界的なプラットフォームの上では、世界中の無数の試みのなかで、一部の本当に革新的なものが選ばれ、世の中を変える。インターネットはそうやって、アマゾン、グーグル、ウィキペディア、フェイスブックなどを生み出してきた。「スマホ＋インターネット」は今後、さらに何を生み出していくのか。

消費者市場を大きく変えたスマホは今、企業のビジネスも変えつつある。企業の多くは直接・間接に消費者ビジネスを展開している。消費者全員が「バーチャル世界への究極の入出力デバイス」を持っている時代には、そもそも顧客との距離の取り方も含めて大きく変わっていくはずだ。ソーシャル活用やO2O（Online to Offline）はその典型的流れだ。また、企業内部においても、社員がこのようなデバイスをもっているのであれば、コミュニケーション・コラボレーションや社内外の情報アクセスも最適化でき、ひいては企業活動自体の改革につながる。さらには、大量生産の効率化を追求する工業化時代とは違う企業間力学を生み出しつつある。



スマホのその先

この延長線上には何があるのか？今、コンピュータ＋インターネットが携帯電話という個人デバイスに乗った。その次は間違いなくモノへの接続が大きな流れとなる。この動きをIoT（Internet of Things）という。

車や家電など、モノからの情報を利活用し、モノを遠隔あるいは自動でコントロールする。このモノプラットフォーム上では様々なアプリケーションが試みられ、イノベーションが実現していく。これは、多くの産業に根本的な影響を与えていくだろう。

インテックは、IPv6の取り組みを10年前から進めており、2012年4月からの中期経営計画では、産業や社会システムの高次化に資するユビキタス・プラットフォームの構築を掲げている。この大きな目標のもと、富山環境未来都市をはじめとして、スマート関連事業を積極的に展開していこうとしている。私もその一員として力を尽くしたい。